

文章講座

大阪

安部 佳子

担当講師 吉田 和明

四が並んだ手術の費用

安部 佳子

平成二十一年春に股関節の手術をした。お産以外に入院したことがなかったので、手術をするのも心配だったし、入院費用がいくらかかるのかも心配だった。

手術の同意書に署名も済んで、預血も済んで、準備がすべて終わった後で、窓口に費用を聞きに行くと、「四万四四〇〇円」だと言われた。

「四」が三つもそろっている。「死、死、死」とすぐに思い浮かび、頭が真っ白になった。これから手術だというのに、この数字かと思った。数字を決めた役人は、病気の人の気持ちを考えたことがないのかと腹が立つてきた。病院の病室にも「四」と「九」の部屋はない。

友人に話したら、「四」を「良い、良い、良い」と考えて発想転換すればいいのよ、と言われた。百万円以上かかる費用が、制度で四万四四〇〇円で済むのはありがたい。が、四が並ぶ半端な数字でない方が、少し高くても高齢者は喜ぶと思う。

(『産経新聞』二〇一五年一月二十一日号掲載)

私の生まれ故郷は大阪である。小学五年生の時、私は集団疎開へは行かなかった。父の会社の疎開先である金沢に、家族で疎開した。終戦後は父の仕事の関係で大阪へは戻らず、東京に転居した。それからはずっと東京住まいである。大阪へは終戦の翌年、父と満員列車に乗り一度帰った。元住んでいた家は全焼していた。跡形もない。私は通っていた小学校へ行ってみた。直撃弾を受けたという講堂は壊れていたが、校舎は残っていた。叔父や叔母の家も、父の叔父の家もすべて全焼してしまっていた。

大阪が復旧してからは一人で大阪へ行き、友人の家に泊まつたりしていた。そのときには必ず実家のお墓参りに行った。

二〇〇七年からは毎年十一月の末か十二月の初めに、妹と大阪へお墓参りに行っている。今年はJR東海の「50プラスフリープラン大阪二泊ミニエリア」というセットプランを使った。宿泊はホテル日航大阪で、妹と二人で新幹線代を含め五万八六〇〇円だった。ホテル日航大阪は御堂筋に面した二十八階建てのホテルで、今回の部屋は二十六階だった。眺めが良く、日の出も見ることができた。

御堂筋を挟んで向かい側には大丸百貨店がある。数年前までそこう百貨店だった建物である。御堂筋の銀杏の樹も黄色く色づき美しい。ホテルの地下から御堂筋線の心斎橋駅と大丸百貨店の地下へとつながっている。

ホテルに荷物を預け、先に天王寺・市営南霊園にある実家のお墓参りを済ませた。今年はぜひ、HARUKAS300に登りたかったが、日曜日で人出がすごかった。チケットを買うための列ばかりではない。入場の順番を待つ人々の列も長々と続いていた。私たちは諦めて、十六階にあるあべのハルカス美術館に行くことにした。モネ、スーラ、シニヤックやマティスの点描画が展示されていた。一度ホテルに帰り、心斎橋筋商店街のアーケードに出かけた。戎橋のグリコの看板のネオンが新しくなったというので見たかったが、七時過ぎなのに、まだネオンは点いていなかった。中国人の観光客が多く、両手に免税店で買った荷物を持って大勢歩いている。

去年食べておいしかった今井うどん店でうどんを食べる。なればランド花月に行って、明日の切符を買おうと思ったが、十一時の回も、二時半の回も売り切れだった。やっと七時開演の「よしもとDANCE新喜劇」のチケットを買うことができた。帰りには大寅蒲鉾本店で白天とハモの皮を買った。

HARUKAS300が九時に開場すると聞いていたので、帰京する日に間に合うようにホテルを出た。ちょうど九時に着き、一番にエレベーターで六十階の天井回廊へ登ることができた。大阪平野、京都、六甲山、明石海峡、淡路島、関西国際空港も見ることができた。実家のお墓のある市営南霊園も見ることができた。五十八階の天空庭園には大きなあべの熊のぬいぐるみが置いてあった。マリOTT都ホテルも見える。このホテルは十九階と二十階、三十八階から五十五階までが宿泊用の部屋になっている。今年の夏に泊まる予定だったが、急に

中欧への旅に出かけることになり、泊まることができなかった。いつか泊まろうと思っている。

二度目の中欧

安部 佳子

映画『第三の男』に出てきた観覧車に乗りたくて、夫と中欧を訪れたことがある。二十数年前のことだ。ツアーだったので自由な時間はなく、夜になって、地下鉄を乗り換え観覧車に乗りに行った。日本の観覧車とは違って細長い箱形で中央に机があり、十人でも乗れる広さだった。

今回のツアーは、「オーストリア航空往復直行便三都市二連泊、中欧四ヶ国八日間の旅」だった。孫が大学に入学したので、一緒に行くことになった。孫は毎年夏休みにハワイに行っているが、ヨーロッパは初めてだった。どこに行くのが良いかと考えたが、昔のヨーロッパの街並みが残っている中欧に決めた。

夫と行ったときにはユーロもなく、カードも使えなかったのが大変だった。しかし、今回もユーロは東京で両替できたが、チェコの通貨コルナは成田空港、ハンガリーの通貨フォリントはハンガリーでしか両替できなかった。

海外旅行には三十数回行っているが、旅行代理店はいつも阪急を使っていた。しかし、今回は、阪急のツアーは人が集まらず中止になったので、初めてクラブツーリズムを利用した。クラブツーリズムは美食をテーマにした旅や、美術館めぐりを

テーマにした旅等、国内旅行ではよく利用するが海外旅行での利用は初めてだった。いつも利用する阪急と比べると、夕食が付いていないことが多かった。

スーパーに夕食を買いに行ったがレジ袋はくれなかった。ホテルの部屋にはポットも置いてなかった。

ウィーンで国立歌劇場（オペラ座）を訪れたとき、トム・クルーズの映画のロケをしていた。オペラ座の屋上からロープを垂らしてある。それをつたって下まで降りるらしい。昼食後、再び私たちがオペラ座の前まで戻ったとき、ちょうどその場面を撮っていて、トム・クルーズが女性を抱えて降りてくるシーンを撮ることができた。

オペラ座前からホテルまでバスに乗って帰った。オペラ座から五つ目だったが、降りる人や乗る人がいないと停留所を通過するので、よく外の景色を見ていないと乗り過ごしてしまう。押すボタンは天井にあるので、背の低い人は届かない。

見覚えのあるガソリンスタンドが見え、四、五人が降りたので一緒に降りた。停留所で孫と同じ年くらいの女の子に声をかけられた。彼女は日本人の母とオーストリア人の父と五歳の時からウィーンに住んでいるという。バスの中で日本語の会話から聞こえたので、私たち二人が降りてくるのを待っていたという。日本語、英語、ドイツ語が話せるらしい。ホテルの名前を言って、彼女に方向を教えてもらった。彼女に教えてもらわなかったら迷子になっていたかもしれない。

つなぎたかったその手

青木 理恵

昨年春、何度か二人で散歩をした。散る桜や辺り一面の萌える緑に、うつとりとした。

あなたは楽しそうに喋っていて、「新緑がこんなにきれいだなんてなあ。宝石みたいだね」と言っていたよね。私も、今まで一番美しい新緑だと思った。

並んで歩いていて、手をつなぎたいと思った。でも、できなかった。いや、そうしなかった。手をつないだら、楽しそうあなたのお喋りが止まってしまうと思ったから。入院中、外泊という形で帰宅していたあなた。新緑の季節から一ヶ月半で亡くなるとは思わなかった。

もしも手をつないでいたら、どうだったろう。その瞬間、二人とも言葉を失い、涙が止まらなかつたかもしれない。手はつなげなかつたけれど、心はつながっていたよね。そう言ったら、あなたは笑うだろうか。

胸を張っていけるよ

青木 理恵

お昼前、担当の先生から「ご主人ですが、ここ二、三日かもしれない」と連絡を受けた。慌てて病院に泊まり込む用意をして、家を出た。そんなときに限って病院の駐車場がいっぱいで、

三十分も車を止められなかった。やっとの思いで病室にたどり着き、ドアを開けたら、「待ってたんだよー」とにつこりしてくれた。

二時間ほど経ったとき、「今日は早く帰って、家でゆつくりしたら」と言ってくれた。「でも私、今日からここに泊まるね」と応えたら、「そうか、今日泊まるんだ」と喜んでくれたよね。窓から見える夏の山並みと、差し込む日射しがまぶしかった。

それからすぐに、あの言葉。お別れとは思わなかった。「君や子供たちに会えたのは、かけがえのないことだから」。そう言ってもらえたことで、私も子供たちも胸を張って生きていくよ。ありがとう。

おとなになってからでも

青木 理恵

父が銀行員だったため、幼稚園、小中学校時代に、転園と転校を繰り返した。

高校三年になる直前の春休みにも父の転勤があり、さすがに編入は難しいだろうということになって、一年間下宿をした。

お父さんの転勤のお陰で、あちこちに友達ができて楽しいでしょう、という人もいるが、子供にとって転校はかなり神経をつかう出来事だ。ましてや、銀行員は辞令が下りて一週間ほどで家族も引越さねばならず、友達との別れを惜しむ暇もない。小・中・高を名古屋と沼津で過ごし、今も連絡をとりあう友

人もいるが、そこに実家があるわけではない。実家は和歌山県新宮市だ。帰省しても、そこに幼なじみといえる人はいない。学生時代、幼なじみといえる人が実家の近くにいてる人がうらやましかった。「子供のために、結婚するなら絶対に転勤のない人」と、中学生の頃から固く心に誓っていた。学生時代はずっと、地元がない淋しさを感じていた。

今、三人の息子たちは生まれてからずっと同じ地域で生活し、つきあいの長い友人もいる。お陰で私も、仲良くなったお母さん方とのつきあいが長くなり、住んでいる埼玉県鶴ヶ島市が地元だと、胸を張って言える。

車で十五分ほどの職場の友人たちとも、十年以上のつきあいになった。女子会をはじめ、一緒にデイズニーリゾートに行ったり、バス旅行を楽しんだりもしている。

三年ほど前からは、古い知り合いとときどき会うようになり、新たな楽しさを感じている。名古屋での小学校時代の同級生だ。転校後は連絡を取ることはなかったのだが、同窓会に出席したときに三十五年ぶりに再開した。隣の席に座った一人とアドレスを交換した。数年経って彼女のお嬢さんが東京の大学に進学し、それを機会にときどき会うようになった。都内に住む男子も一人加わった。

彼女とは同じクラスだった。鼓笛隊でも一緒だった。仲は良かったが、毎日一緒にいたわけでもない。ましてや彼とは同じクラスになったこともなく、ほとんど話したこともなかった。

それでも久々に会ってみると、不思議と気があった。彼女にも彼氏にも子供が三人ずついる。そのことにも驚いた。話せば

話すほど興味が広がり、深まっていく。音楽、文学、家族、仕事、趣味……。人生に厚みが増していく感じだ。

友人と会うときに、気持ちよく送り出してくれる家族に感謝している。何と言つても帰れる家があり、家族がいるというのは、ありがたいことなのだ。

不景気を感じる時

吉田 緑

私は早起きなので、朝五時前から起きて犬の散歩に行く。

私の家は駅から近い。家を建てた十五年前は、駅にむかつて歩く人しか会わなかった。彼らは、五時少しすぎの始発電車に乗るのだろう。始発電車から降りて、帰ってくる人に会うこともあったが、だいたいが朝帰りの酔っぱらいだった。しかし今は、始発電車で帰ってくる人に何人も会う。駅前のコンビニや二十四時間営業のスーパーの袋を下げている。帰って食事をして寝て、夕方になって起きるのだろうか。

世の中の流れで夜中の仕事が増えたのだろう。二十四時間稼働の工場、宅急便や荷物の梱包や行き先別の仕分け、飲食店やスーパー、コンビニなど、夜中に働いて朝までの仕事はたくさんある。

夜の勤務は、昔からあった。守衛さん、看護師、ガードマン、夜のビル掃除、夜間工事……。私の知らない夜の仕事ももっとたくさんあるに違いない。夜中に起きて働いていたら身体に応

える。そのかわり、賃金はその分高かった。しかし、今はそうではないだろう。彼らは不安定なアルバイトや契約社員でしかないだろう。日雇いかもしれない。家族のために働いている人もいるだろうが、私が朝会う人は皆、一人分と思われる弁当や飲み物を買って帰っている。将来の見通しどころか、半年、一年先もわからない生活だろう。身体を壊したら保障もないに違いない。

朝の散歩で気になることがもう一つある。資源ごみに分けられた空き缶に、ビール缶が少ないことだ。発泡酒や第3のビールの空き缶が多い。不景気を象徴しているようで悲しくなる。誰が好きで発泡酒を飲むだろう。

私は、日本の美味しいビールは世界に誇れるものだと思つている。そのビールに酒税をかけすぎるから、ビールではない発泡酒が生みだされた。日本の看板商品を国が保護しないでどうする。不景気でも頑張つて働いている人に、美味しいビールを我慢させて、発泡酒を選ばせていることを恥ずかしいと思わないのか。外国人が発泡酒を飲んだら、「日本にはビールに似た不味い飲み物がある」と言うはずだ。国益を損ねるとはこのようなことだと思ふ。

不景気だということ、国はもつと真剣に受けとめるべきだ。誰もが人並みの生活、幸せを望めるように策を打たなければならぬ。労働者を不安定な立場で働かせることを禁止し、使用者には彼らが普通に生活できるだけの賃金を支払わせるべきだ。私は毎日、始発電車で帰ってくる人たちを見てそう思う。

さらに、こんなことも考えるのである。二十四時間勤務をし

てくれる人がいて、宅急便が翌日に時間指定で正確に届き、夜中でも食べ物が買える。しかし、その便利さは、本当に必要なことなのだろうか。必要ないのではないか。

ある朝、以前から何度もすれ違っている人に声をかけられた。「奥さん、この犬、珍しいね、高いだろ」。私は、「ちよつと高いけど」と応じた。返事をしないのは、無視していることになると思ったからだ。しかし、私はそれ以上言葉をつなぐことができなかつた。私は可愛くて育てているのだが、確かに二十万円以上した犬だ。それは彼の月給に相当する額なのかもしれない。ふと、そう思ったからである。彼らから見たら私たちはどう見えていたのだろう。夜、働いて始発で帰ってくる彼らには、私や私の犬は目障りな存在だったのかもしれない。

不便になった

吉田 緑

銀行に出かけた。金銭や契約がらみのことは落ち着いてやりたいので、早めに家を出た。もちろん、通帳と印鑑、キャッシュカード、身分証明書を揃えて行つた。不備はない。にもかかわらず、希望の金額はすぐには降ろせなかつた。「この口座からは、一日、五十万円しか引き出せない」という。それは、ひつたくりや盗難にあつたときのリスクを減らすために、自分でそう設定した金額だつた。そのことを忘れていたのだ。私は、何枚もの書類や伝票を書き一時間も待たされて現金を引き出した。

定期預金の金利の低さにあきれ、解約してもたいした損はないと判断し、その手続きをしに行つたときのことである。

行員は使用目的を訊くだけで、引き続き預金をして欲しいとも言わない。帰りにティッシュペーパーの一つもくれるわけではない。多額に引き出しをしたが、残高はある。縁が切れるわけではないし、長年の顧客ではないか。二十年前なら、一抱えの粗品やカレンダーなど持たされたものだ。粗品が欲しいわけではないが、顧客の扱いが悪すぎる。

留めは、「ネットバンキングでお手続きできます」と言われたことだ。そんなことは私だつて知っている。私はネット上で銀行の口座番号を入力したくない。信用していないからだ。特に大金を預けてある口座は、絶対にアップしないと決めている。クレジットカード決済も、小額しか使えない設定のカードを使っている。時代遅れだと言われるかもしれないが、ネット上のどこに安全の保証があるのか。

窓口の人の融通が利かなかつたり、銀行の処理にも時間がかかつたりして、予定していた時間を過ぎてしまった。次の約束に遅れるので、電話をしようと思つたら携帯電話を忘れていた。銀行内に公衆電話はない。電話を貸して欲しいと申し出たが、銀行では電話は貸さない決まりだと断られた。

私は銀行の外に出た。駅前ロータリーなのに公衆電話が見当たらない。交番で尋ねたら、駅の反対側の出口にあると教えられた。公衆電話はコインではかからない機種だつた。テレフォンプラカードは持つていなかった。私は交番に戻つて、お廻りさんに「お金を払うから電話を貸してほしい」と頼んでみたが断ら

れた。代わりにと、お巡りさんは交番に準備されていたテレホンカードを貸してくれた。

電話をかけて、カード残高が残っていたので、自販機の缶コーヒを一箱買って交番に返しに行った。若いお巡りさんは、「携帯電話を持たずに外に出る方が非常識だよ」と言いたげに笑っていたが、気持ちよく缶コーヒを受け取ってくれた。電話をかけられなければ、約束の相手を三十分以上待たせることになった。「携帯電話を忘れてきてかけられなかった」と言い訳をしても相手は治まらなかっただろう。

世の中はどんどん便利になっているが、あるいはその分だけ不便になったとも言えるのかもしれない。私はふと、そう思わずにはいられなかった。

あきらめない

吉田 緑

「昔、物の無い時分、おじいちゃんの背広を縫い直して、家族のオーバーやスカートを縫ったものだ」と父に聞かされた。この言葉が子供の頃、耳から離れなかった。

戦争中や戦後、都心でひどい思いをした父やその姉妹（私の叔母）たちに育てられたからか、私は「もつたいながり屋」で、物を捨てられない。そのくせ浪費家で買いた物が好きだ。特に着るものを捨てないので家の中は倉庫のようだ。ひとり分の衣類ではない。夫には「捨てる、捨てる」と言われている。

結婚して暇になった頃、今までできなかった苦手な針仕事をしようと思いついた。

学生時代の家庭科授業で習ったことすら覚えていない。最低レベルの、初歩からの洋裁や手芸、パッチワークキルトを習いに行った。NHK教育テレビの、婦人向け手芸の番組を熱心に見て、取り入れられること取り入れていった。そのうち何から何まで教わらなくても、少し段取りの説明を聞くと理解できて、出来るようになった。

材料をテキストの指定通りに完全に揃えなくても、ある物で工夫して自分なりに作れるようにもなった。父の言葉を思い出したのはこの頃だ。「古い洋服を解いて、生地として使える」。あれもこれとも思いつくまま作品にした。生地や材料を買えないわけではない。「あの洋服を壊して……」と考えるのが楽しいのだ。思いもかけぬものができたりする。それをリフォームやリメイクと言うそうで、古着を利用した手芸、洋裁の本も出ている。それから十年が過ぎた。今ではそれが趣味になっている。

古い着物もリサイクルすることが、面白くてやめられなくなった。結構上手くなったようで、着て街に出ると見知らぬ人から声をかけられたりする。

世の中がエコだ、ロハスだ、リサイクルだという考え方に傾いている。私は、世相や流行りに乗って、捨てずに再利用しているわけではない。が、時代に合った生活スタイルをしている人だと思われているようだ。そうして、環境に配慮した考えの人だと他人に受けとめられることは、少し照れくさい。

改めてやってみると、できるようになることもある。この経験は、私には大きかった。今では和裁にまで手を広げた。「今時、なぜ和裁なんか習うの」、と言われる。日常に着物を着る人が稀になった今、大変な思いをして和裁を覚えても仕事に結びつきにくいと考えるのが普通ではないだろうか。時間とお金をかけて習うのなら洋裁の方が良いと大部分の人は思うだろう。多くの女性は、何でも流行りに乗って始める。パッチワーク、編み物、ハワイアンキルト、ビーズアクセサリーと流行ものの教室は満員だそうだ。

私は誰もがやり始めると、冷めてきてしまう。嫌気がさしてくる。希少価値とまで言われる和裁を習って、たんすの中の着物を自分で縫い直せるようになった。仕立てられるようになった。作り変えて別のものにするのは洋服より着物の方が楽なのだ。着物から帯や襦袢を作ったり、羽織やコートに直して着ることは昔、普通にしていたことだ。

何かひとつでも上手になると自信がついて前向きになれる。他のこともきつとできると思えるようになる。今年は、手の込んだ作品を仕上げたいと思う。



あとがき

このたび、「淑徳アカデミア」の第七号を発刊することができました。

この創作集は、淑徳大学公開講座を受講するみなさんの日頃の創作を発表する場をつくることを目的にしています。受講生のみなさんには、ますます創作の研鑽に資していただきたいと思えます。

今年も、各講座の受講生の作品だけでなく、一部豊島新聞に掲載の「リレーエッセイ」を掲載させていただきました。

講座をご担当の先生のご著書(共著)のご紹介です。「親鸞の世界『教行信証』を読む」前田壽雄先生の『仏事Q&A 浄土真宗本願寺派』(浄土真宗本願寺派総合研究所・国書刊行会)。「柳田國男の年中行事論」高見寛孝先生の『巫女・シャーマンと神道文化』(岩田書院)。「短歌の実作と秀歌鑑賞」沢口芙美先生の『歌集 やはらに黙を』(本阿弥書房)。「イギリスの詩を読む」森山恵先生の『岬ミサ曲』(思潮社)。「フランスの詩を読む」有働薫先生の『詩集 モーツァルトになっちゃった』(思潮社)。「上手い蕎麦をたぐるために」高橋克典先生の『レストラン「藤木」へようこそ』(平原社)。「華嚴経を読む」河波昌先生の『あなたの心はなくなりてー空外上人を偲んでー』(無二会)。「福島泰樹氏の短歌講座」福島泰樹先生の『中原中也の鎌倉』(冬花社)。「源氏物語の世界(宇治十帖)を読む」宮川葉子先生の『江戸に生きてー

正親町町子の半生』(白鷗社)。「村上春樹の世界」鈴木和成先生の『村上春樹は電気猫の夢を見るか?』(彩流社)。「赤毛のアンの世界」松本侑子先生の『赤毛のアン』の幸せになる言葉』(主婦と生活社)。「中島伸子先生の音楽教室」中島伸子先生の『ピアノスト 中島伸子 Presents Ensemble Festa 2015 Suntory Hall・会場サントリーホール(ブルーローズ)・日時2015年5月6日(祝)10時開演・出演ピアノ:中島伸子 Disciple Guest: 大沢聡』淑徳大学エクステンションセンターでは、淑徳大学教育学部公開講座「現代日本の教育革命(新井保幸編著)」(高陵社書店)を、出版いたしました。

改めまして、各講座をご指導いただきました講師の先生方および豊島新聞にご執筆いただきました先生方に、こころよりお礼を申し上げます。

淑徳アカデミア第七号

発行年月日 平成二十七年五月二〇日発行

著者 講座講師および受講生

発行所 淑徳大学エクステンションセンター

発行所 淑徳大学池袋サテライト・キャンパス

〒一七一一〇〇二二

東京都豊島区南池袋一―二十六―九

MYT第二ビル7F

TEL 〇三―五九七九―七〇六一

FAX 〇三―三九八八―七四七〇

印刷・製本 日本電算機用品株式会社



(写真：石田美菜子)



淑徳大学エクステンションセンター